

## &lt;実践研究&gt;

## 通常の学級に在籍する書字困難のある児童の タブレットを活用したノートテイキングトレーニングの実践

山下 祥代\*

書字困難のある児童生徒の授業中の板書や活動の記録、問題演習のためのノートテイキングに対する合理的配慮事例として ICT 機器を含む AT (Assistive Technology) の活用が多く紹介されている。しかし、1 単位時間の授業内で必要な情報を、教員の想定している作業時間内に児童生徒が AT を活用して記録する具体的な過程やトレーニングについての詳しい報告は少ない。そこで、公立小学校 6 年生が中学校進学後にタブレット PC を活用したノートテイキングを実現するため取り組んだ 2.5 ヶ月間のスキルトレーニングについて報告する。対象児童は、計 5 回のスキルトレーニングを通して、自立したノートテイキングを実施できるスキルを身につけることができたが、本実践は当該児童の 1 事例に関する報告であり、引き続き書字困難のある子供のスキルトレーニングの効果について検討を進める必要がある。

キーワード：書字困難 授業 ノートテイキング アシスティブ・テクノロジー

### I. はじめに

#### 1. 書字困難のある子供への合理的配慮

日本語は、音韻に関連した読み障害が起こりにくい言語であるとされるが、表音文字であるひらがなと表意文字である漢字を混在して用いる特質を持ち、音韻の認知のほか、形や空間の認知など複数の要因による文字の読み書きの困難が生じることが推測される。Akira, Taeko, Noriko, Masato, and Naoko (2009) によると小学 2 年生から 6 年生の児童のひらがな、カタカナ、漢字の読み書き能力は文字の種類により異なり、書字に着目するとひらがな 1.6%、カタカナ 3.8%、漢字 6.0% の出現率が示されている。このことから、学習障害や発達性協調運動障害など様々な理由により書字困難の様子を呈する児童生徒が通常の学級を含め一定数いることが考えられる。

授業のような伝達の場でのノートテイキングの役割は、伝達された内容と受講者の頭の中にある表象とを繋ぐものであり、それらを表現するものであるとされる (大坪・東畑, 2012)。また、その場での記録に限らず、記録後や授業終了後に記録内容を見直すことは知識獲得のための手段であり、学習方略・スキルであると考えられている (小林, 1997; 小林, 2000)。

書字困難には文字を正確に書くことの困難さのみな

らず、音韻を意識した操作の困難さや聴写課題、文字の認知特性から空間構成の困難さや同じ筆跡で書き続けること、空間を把握し幅や高さを考慮して書くことなど多側面から困難さが複雑に関連し顕在化していると推測されるが、どの場合においても、書字に要する時間の超過や記録した文字を読み返すことの困難さから期待されるノートテイキングの役割を十分に達成できないことが想定される。このことは、子供の過小評価に繋がるのが危惧され、全ての子供が平等に教育を受ける権利を享有・行使するためにも必要かつ適当な変更・調整をした合理的配慮を行うことが期待される。

#### 2. ノートテイキングにおける合理的配慮

文部科学省は、通常の学級における書字の困難さのある子供への支援方策として ICT 活用などをまとめて公開している (筑波大学, 2011)。例えば、ノートをとることが難しいとき、デジタルカメラやタブレット PC での撮影・記録や、キーボード等による入力、音声データの活用が提案され、導入事例として数行の感想をメモアプリを使用して作成する授業が紹介されている。書字の代替手段は多く提案され共有されているが、本吉らが指摘するように、学校生活での導入や習慣化されるまでにはそのプロセスが重要である (本吉・坂本, 2021)。多くの場合、AT を活用した書字の機能代替方法に関する提案に留まることが多く、授業に即して 1 単位時間の授業内で黒板の記録をノート

\*広島大学大学院人間社会科学研究所  
博士課程後期教育科学専攻

に書きとるノートテイキングの方法については具体的な提案がされておらず、これまでの研究報告も数が少ない。

### 3. 目的

本稿では、書字困難のある小学6年生が中学校進学後に、タブレットPCを用いてノートテイキングを行うことを目指して取り組んだトレーニングについて報告をする。トレーニング内容と授業中の行動観察からトレーニング効果を報告し、ノートテイキングにおける合理的配慮の実施を具体化し、学校生活での習慣化までのプロセスに関する基礎的情報となることを目指す。

## II. 方法

### 1. 対象

対象児は、通常の学級に在籍する小学校6年生の男児（以下、A児）である。医学的な診断は受けていないが、書くことの困難さを訴えていた。特に、授業時間内に決められた分量を書くことの困難さ、長い文章を書くにあたって構成を考えながら書くことの困難さ、指定された枠内に大きさを調整して書くことの困難さ、字形を整えて書くことの困難さが顕著であった。小学校では、授業時間内に書ききれない際には担任が黒板の写真を撮影しA児へ渡すことや、分量の調整のためにワークシートを活用する支援が実施されていた。

### 2. トレーニングの実施期間

202X年12月下旬～202X+1年2月の期間にトレーニングを5回、A児の自主的な取り組みとして授業実践2回、家庭実践6回、さらに中学校進学後202X+1年5月～6月に3回活用評価を実施した。先行研究を参考に、実態把握期、支援期、実践期と分け、計16回のトレーニングおよび取り組みをTable 1に示す。

### 3. A児の実態（#1、2トレーニングより）

（1）診断名、知的発達の状態：診断はなく、知的発達に課題は認められない。

（2）視力：普段から眼鏡を着用しており、矯正視力値は遠見視力、近見視力ともに課題は認められない。

（3）視覚認知（WAVES A課題）：目と手の協応について課題は認められないが、その正確性に苦しさと考えられる。

（4）筆写の状況（URAWSS、近見・遠見数字視写検査）：URAWSSの結果から、有意味文章、無意味文章の書き速度は通常の範囲内であるが、マスからはみ出しが見られた。読み速度は $-1.2SD$ で、内容理解は6問中4問正答という状態である。数字視写課題では、速度は通常の範囲内であり、マスからはみ出しや筆写間違いは見受けられない。

（5）読み書きの力（STRAW-R）：読みの流暢性は通常の範囲内であるが、誤反応あるいは自己修正を行う様子が多くみられる。読みの正確性は通常の範囲内である。書きの正確性は、 $-2SD$ であり困難さがあった。カタカナの単語では形が鏡文字になる、画の増減があり、漢字は想起の困難さが顕著であり、正答した漢字のうち、4年生までの既習漢字は3文字（いずれも1、2年生の漢字）、部首が合っている漢字は2文字、同音異義語は1文字であった。

（6）タブレットPCでの入力スキル：URAWSSの有意味文章課題を利用してタブレットPCでの入力速度を確認した。使用したソフトは、Word(Microsoft)で、キーボードによるローマ字入力を行った。3分間で70字の入力が完了し、入力中の誤入力や変換ミスについては逐次、A児が気づき修正を行った。漢字の変換ミスや入力ミスは見られなかった。入力速度は、URAWSSの評価基準に基づく通常の範囲内であり、学習手段として十分に活用ができると考えられる。

Table 1 トレーニング・実践的取り組みの内容、回数及び場所（#はセッション回）

	内容	回数	場所	実施回
実態把握期	読み・書きの実態把握	1	B小学校	#2
	ICT活用スキルの実態把握	2	B小学校	#1～2
	授業中のICT活用状況把握	3	C中学校	#6～8
支援期	ノートの構成、詳細に関する相談	1	B小学校	#3
	ノートテイキングスキルのトレーニング	3	B小学校	#3～5
実践期	授業でのICT活用（授業実践）	2	B小学校	#3、4実施後 小学校在校中
	宿題でのICT活用（家庭実践）	6	自宅	#3実施後 小学校在校中

以上のことから、書くことの困難さが顕著であり、書くことや漢字に対する苦手意識を強く感じている状況であること、空間把握の苦手さや手先の不器用さなどから、特に速度を求められる状況下において書字運動を制御すること、字形を整えることが困難な状況が書くことの困難さや書くことへの意欲低下につながっていると考えられた。

(7) タブレット PC 活用経験：在籍する B 小学校では、10.1型デタッチャブルノート (Windows) (以下、タブレット PC) が貸与され Word や Excel、Power Point などの Microsoft ソフトウェアが自由に使えるようになっている。授業の一環として、調べた内容を基に Power Point を用いてプレゼンテーション資料を作成し発表した経験があった。プレゼンテーション作成では、スライドの作成や文字入力、写真等の挿入、アニメーションなどの基本的機能について学習し、活用するに至っていた。

#### 4. ノートテイキングスキルトレーニングの概要 (# 3~5 トレーニングより)

支援期は、実態把握期に得られた情報を基に機器やアプリケーションの選定、ノート構成の検討、利用する機能を活用するスキルのトレーニングの3つの段階からトレーニングを構成した。

(1) 機器やソフトウェアの選定：保護者や A 児のニーズとして、B 小学校でこれまで活用してきたタブレット PC と同じ機種を進学予定の C 中学校でも貸与されることから、タブレット PC を活用したノートテイキングに取り組みたいという願いがあった。また、A 児の小学校担任から、貸与されるタブレット PC で利用できるアプリケーションは限定的であり、A 児専用を用意することは難しい可能性について情報を得て、A 児のこれまでの活用経験から Microsoft ソフトウェアを活用することとした。A 児の使いやすさを優先し、また、千葉 (2017) が指摘する通り、よいノートとして板書筆写が可能であること、図解的・構造的な記述が可能であること、視覚的なビジュアル効果を利用できること、学習や思考の過程を記録し整理することができることなどのノートの機能を果たすることができる機器及びソフトウェアとしてタブレット PC を活用した Power Point によるノートテイキングを行う方針とした。

(2) ノート構成の検討：タブレット PC によるノートテイキングの記録の保管方法について A 児の希望と家庭の出力環境などから、Table 2 に示した項目について検討した。

また、ノートづくりは板書を真似ることに始まるとされ、特に小学校低学年時には具体的な視写活動が

Table 2 ノートテイキングにおけるスライドレイアウト項目

検討項目	選択肢
スライドサイズ	A4* B5 その他
スライドの向き	たて よこ*
1日分の記録方法	ノート型 (1スライド内に複数の学習日を羅列する、Fig 1) スライド型* (1スライドに一つの学習日の内容を記載する、Fig 2)
背景色	白* 黒 その他

なお、A 児が選択した項目には \* を付した

9月16日(月)

めあて かけ算のしかたを考えよう。

9月17日(火)

めあて 1けた×2けたのかけ算の筆算を考えよう。

$$\begin{array}{r} 4 \\ \times 25 \\ \hline \end{array}$$

Fig. 1 ノート型例

9月16日(月)

めあて かけ算のしかたを考えよう。

9月17日(火)

めあて 1けた×2けたのかけ算の筆算を考えよう。

$$\begin{array}{r} 4 \\ \times 25 \\ \hline \end{array}$$

Fig. 2 スライド型例

ノートづくりの土台となると指摘されている（千葉，2017）。このことから、タブレット PC によるノートテイキング指導においても同様にノートづくりについて丁寧な検討が必要であると考え、Table 3に示すノートづくりに関する項目について検討した。

さらに、ノートの構成について予め決まっている内容、例えば学習日やめあての記入、補助線などについ

て、Power Point のスライドマスター機能を利用して事前に用意した（Fig. 3）。また、部品ノート（Fig. 4）として Table 3で示した「使う記号」と横書き・縦書きのテキストボックスを1枚のスライドに事前に用意し、必要な時にはコピー＆ペーストを利用することで迅速に活用できる状況を整えた。

Table 3 ノートテイキングにおけるノート作りに関する項目

検討項目	選択肢
文字の大きさ	黒板の文字→タブレット PC の文字 普通の文字→ <u>14</u> ポイント 大きい文字→ <u>16</u> ポイント 小さい文字→ <u>12</u> ポイント
文字の形	ゴシック体 明朝体* UD教科書体 その他
文字の色	白チョーク→ <u>黒</u> 黄チョーク→ <u>主に赤</u> 赤チョーク→ <u>赤</u> 青チョーク→ <u>青</u> 緑チョーク→ <u>緑</u>
使う記号	黄色い四角→ <u>赤い四角</u> 白い四角 → <u>黒い四角</u> 爆発マーク→ <u>赤い丸</u> 黄色矢印 → <u>赤い矢印</u> ( )

なお、A 児が選択した項目には\*を付し、記入した項目には下線を付した

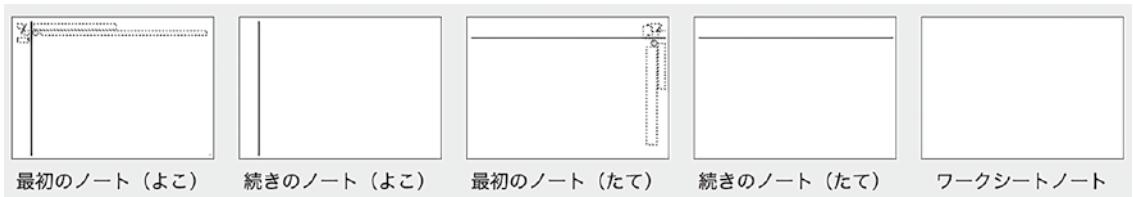


Fig. 3 スライドマスター機能を利用したノートの事前準備

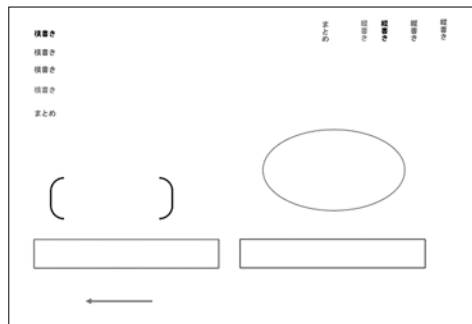


Fig. 4 部品ノート

(3) ノートテイキングスキルのトレーニング：#3～5のトレーニングでは、指導の階層性（野田・松見, 2010；野田, 2018）を参考にして、スキルの習熟度に基づいて課題の内容や指導の方法を決定した。それぞれの段階について具体的には、ノートテイキングで利用することが想定される基本的な機能の確認（獲得段階・流暢性段階）、実際の板書を撮影した写真を見てノートテイキングを実施（般化段階）、実際の授業中にノートテイキングを実施（適用段階）から構成している。

ノートテイキングスキルトレーニングの取り組みは、ワークシートを用意し活用した機能を含め記録しA児や保護者、B小学校と共有した。ワークシートの一部についてFig. 5に示す。

(4) タブレットPCによるノートテイキング時の約束：タブレットPCによるノートテイキングにおいてノートテイキングが目的にならない、適切な授業参加を行うために、以下の4点について「ノートを取る時の約束事」としてA児と共有した。

①授業が始まる時は「最初のノート」を作る。

②全部をキーボードや図形で書かなくても良い。

③ノートの記録が間に合わない時は黒板を写真で撮る。

④たくさん工夫をしたい時やきれいに調整したい時は家で自主学習をする。

### Ⅲ. 考察

(1) ノートテイキングにおける利用機能の習得：板書の写真を見ながらノートテイキングに取り組み、必要な機能を都度、筆者から説明をすることで使用することができた。紹介した機能は、写真のグループ化やトリミング、短縮キーなどがある。いくつかの場面を設定し、実際の授業場面を想定して機能活用の反復練習を行うことで、トレーニング後にB小学校での授業でタブレットPCを利用したノートテイキングを可能とした。授業内でのノートテイキングでは、授業時間内で全ての記録を取ることができ、A児の感覚として、鉛筆とノートを利用していた頃と比べると教師の説明を聞いている時間が増えた。トレーニングで

5 便利な機能を使いましょう。

機能	どんな時に使うのか	どこにあるのか

3 デジタルノートの準備をします。

ノート	サイズ : A4 B5 その他 ( ) 向き : たて 横 まとめ方 : ノート型 スライド型 色 : 白 黒 その他 ( )
スライド作り	操作 : 「デザイン」→「スライドのサイズ」→「ペ」 1. 最初のノート (線、日付、曜日、扉元名、めあて) 2. 続きのノート (線...) 3. 部活ノート (白紙) 4. ワークシートノート (白紙)
部活ノート	操作 : 「表示」→「スライドマスター」 ・部活ノートに必要な部活を作りましょう。 例 : テキストボックス、四角...

4 デジタルノートの約束を決めます。

文字の大きさ	ふつうの文字 : ポイント 大きい文字 : ポイント 小さい文字 : ポイント
文字の形	ゴシック体 明朝体 10教科書体 その他
文字の色	白 黄 赤 青 緑
使う記号	
ノートの書き方	1. 授業が始まる時は、「最初のノート」を作る。 2. 全部をキーボードや図形で書かなくても良い。 3. ノートの記録が間に合わない時は、黒板を写真で撮る。 4. たくさん工夫をしたい時やきれいに調整したい時は家で自主学習をする。

デジタルノート 記録練習 Book

学校名	名前
練習日	
利用端末	利用ソフト

質問1 これまでに(利用端末)を使ったことはありますか？(くわしく)

質問2 これまでに(利用ソフト)を使ったことはありますか？(くわしく)

質問3 読みやすい文字の大きさや形を決めましょう。

ぼくは土曜日に お父さんと 魚釣りに行きま した。朝の	ぼくは土曜日に お父さんと 魚釣りに行きま した。朝の	ぼくは土曜日に お父さんと 魚釣りに行きま した。朝の	ぼくは土曜日に お父さんと 魚釣りに行きま した。朝の
5時に家を出発 したので、ねむ たいです。	5時に家を出発 したので、ねむ たいです。	5時に家を出発 したので、ねむ たいです。	5時に家を出発 したので、ねむ たいです。

Fig. 5 ノートテイキングスキルトレーニング ワークシート (一部)

は、授業場面での活用を通して発見した課題や機能の使いづらさ、困ったことについて聞き取りを行い、解決にあたった。困ったこととしては、ワークシートのデータ化が挙げられたため、カメラ機能の利用や写真の背景画面への設定などについて確認をした。

スキルの獲得に加えた成果として、前述した「ノートを取る時の約束事」②に示した通り、全ての学習内容をキーボード等で記入する必要はなく、鉛筆と紙で書いたほうが良いと判断できるものは、鉛筆と紙を利用し記録として写真を撮ってスライドに保存することを伝えていたが、A 児自身が場面と想定される労力から使い方を思考・判断できたことが挙げられる。また、授業中にノートテイキングを行うことで、学んだ機能を組み合わせたり、試行錯誤しながら達成を目指すこと、また、自身に必要なスキルについて気づくことができたことは、A 児自身が自分にとってわかりやすいノートづくりにつながったと考える。

(2) 身につけたスキルの活用：トレーニングを進める中で、週末課題として課される自由課題でもタブレット PC で Power Point を活用して自主的に取り組む様子が見受けられた。自由課題には、調べ学習や感想文などがあり、A 児自身が文章をまとめ、必要な写真やイラストを挿入しながら課題に取り組むことができた。A 児や保護者、B 小学校担任に鉛筆でノートに取り組んでいた時と変わったことについて尋ねたところ、A 児からは、書きやすくなったこと、書きたいことが書けるようになったことが挙げられた。保護者からは、取り組む時間が短くなったこと、課題をやり遂げるまで集中して取り組めるようになったこと、課題の途中で保護者から声を掛ける回数が減ったことが挙げられた。B 小学校担任からは書いている文章量が増えたことが挙げられた。A 児の書くことの負担感の軽減、アイデアや意見の表現のしやすさにつながったと考えられる。

(3) C 中学校進学後のノートテイキング：C 中学校進学後、7 教科の授業においてタブレット PC によるノートテイキングの様子を参観し、正確性、行動頻度、応用・引用の視点から行動観察による評価を行った。

正確性については、誤字、脱字なく記入ができており、教科の特性に応じて機能を使い分ける様子が見受けられた。教科によっては、手入力に時間がかかる箇所は、写真撮影により対応していた。

行動頻度については、先にも述べた通り、教科によってはワークブック中心の授業であるためワークブック

へ鉛筆で記入をすることが中心であったことや、プリント学習時は直接鉛筆で記入をするなど、全ての授業や活動においてタブレット PC によるノートテイキングを行うのではなく、使い分けている様子が見受けられた。

応用・引用については、教科によっては、プリントの提出期限などから担当教員から「このプリントは、データ化して家庭でもゆっくり時間をかけて良い」と助言を受けることもあった。また、キーボードによるタイピング入力に限ると、授業時間内に全ての黒板の内容を書き切ることができないこともあるが、担当教員から「そろそろ時間だから、後は写真を撮っておいた方がいいんじゃない？」と指摘を受け、撮影をする場面もあり、授業の内容や A 児の様子に応じて活用することができていた。

C 中学校では、教科の特性および教科担任制であることから、前述の通りタブレット PC によるノートテイキングの頻度や方法は異なっている。また、プリントやワークの課題提出方法についても各教科で教員と相談をしながら決定をしている様子が見受けられた。全ての教科において同じ方法でノートテイキングや提出を行うことは非効率であり、これは、中学校における学び方に即した活用方法であると言えるだろう。

ノートテイキングスキルトレーニングとしては、各教科や課題の特徴からどのような対応が行われているのか、A 児の評価、今後の方針についてまとめた用紙を B 小学校から活用していたワークシートに付け、C 中学校と共有することで引き続き中学校内での情報の共有に役立ててもらおうこととしてトレーニングを終了とした。

(4) ノートテイキングスキルトレーニングの成果：本トレーニングを通して、A 児がタブレット PC を用いて、授業中に自立してノートテイキングを完了することができるスキルを習得できたと考える。また、トレーニング内容を B 小学校と共有しながら進めることで、段階に応じて実践的な活用に繋げることができた。筆者が行った具体的なスキルトレーニングは実施回数としては 5 回のみであるが、授業と宿題を通じた実践的な取り組みを同時並行で進めることで、実践的に取り組むための課題への気づきが促されることや、トレーニングの内容が直接的に課題場面での成功体験に繋がり、書くことの意欲が向上したと考える。また、本トレーニングは B 小学校や C 中学校といった特定の場所での授業におけるノートテイキングの実践を目的としたものではなく、タブレット PC による

ノートテイキングのためのスキル習得という基本的スキルを身につけることを目的としていた。#6～8で行ったC中学校での行動観察から、実践の場所がトレーニング時と異なっても十分に成果を発揮することができていた。これは、特定の場面・教科のためのスキルトレーニングとならないように、般化段階、適用段階を通してA児自身がノートづくりに必要な情報を集め、それらをノートテイキング時にどのように取り入れるべきであるかを思考・判断することができたこと、さらに、ノートづくりにおけるPower Pointでの設定に変更や調整ができるような余白を残していたことが要因と考えられる。

#### IV. 今後の課題

本トレーニングはタブレットPCを用いてノートテイキングを行うことを目指して取り組んだトレーニングとして一定の効果があつたと考えられるが、書字困難を訴えるA児1名を対象に実施したトレーニングであるため、書字の困難さのある全ての子供のスキルトレーニングとして有効であるかについては検討が必要である。また、A児はトレーニング当初からタブレットPCでの入力方法について、学習場面で十分に活用できる方法を習得していた。入力手段の獲得はトレーニングを進める上で、ノートテイキングとは別に求められる基本的なスキルであるが、A児には特に何らかの支援、トレーニングは必要のない状況であったため、本報告では触れていない。トレーニングに取り組む児童生徒の実態によっては、ノートテイキングトレーニングの前あるいは同時並行的に利用する機器での入力手段の獲得を目的としてトレーニングを実施する必要がある可能性が想定される。

本実践では、タブレットPCによるノートテイキングを進めてきたが、千葉(2017)が指摘するよいノートとしての機能を果たすことができているかや、紙によるノートテイキングとの機能や学習効果の相違については検討をしていない。タブレットPCによるノートテイキングが学びという視点から、どのような子供たちに推奨されるのか、また、紙によるノートテイキングとの差異やタブレットPC特有の学習効果等については引き続き検討が必要であろう。

#### 謝辞

本実践を実施するにあたり、トレーニングの実施に

全面的にご協力いただいたB小学校及びC中学校教職員の皆様、執筆をご快諾くださったAさんと保護者様に深く感謝申し上げます。

また、本取り組みについて指導助言ならびにAさんの実態把握のため各種検査等機材をお借りし、その分析についてもご指導を賜りました広島大学大学院人間社会科学研究所氏間和仁先生ならびに氏間和仁研究室所属今津麻衣さん、張凱琪さん、諸星奏希さん、田中円華さんに感謝申し上げます。

#### 文献

- 千葉 昇(2017)ノート伍則ー子どもの思考を促すノート指導ー. 初等教育論集, 18, 28-38.
- 小林敬一(1997)ノートテイキング研究に対するエスノグラフィックな検討. 九州大学教育学部紀要, 42, 21-34.
- 小林敬一(2000)共同作成の場におけるノートテイキング・ノート見直し. 教育心理学研究, 48, 154-164.
- 本吉大介・坂本 南(2021)書字障害がある児童への機能代替アプローチの考え方に基づくICT活用のための学習支援. 熊本大学教育学部紀要, 70, 121-128.
- 野田 航(2018)応用行動分析学と学習指導. 教育心理学年報, 57, 179-191.
- 野田 航・松見淳子(2010)子どもの基礎学力向上のための機能的アプローチ. 人文論究, 59(4), 109-122.
- 大坪治彦・東畑貴昭(2012)教師の板書計画とノート指導に関する一考察. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 63, 107-119.
- 筑波大学(2011)通常の学級編(委託先:筑波大学). 文部科学省, 2011.[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/1408030.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1408030.htm) (2023/4/20閲覧).
- Uno, A., Wydell, T. N., Haruhara, N., Kaneko, M., & Shinya, N. (2009) Relationship between reading/writing skills and cognitive abilities among Japanese primary-school children: Normal readers versus poor readers (dyslexics). *Reading and Writing*, 22, 755-789.

(2023.12.6受理)

## **Training of Note-Taking using Assistive Technology for Children with Writing Difficulties in Regular Classes**

Sachiyo YAMASHITA

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University

There are many case reports on the use of Assistive Technology for note-taking support for children with writing difficulties. The purpose of note-taking is to record information from the blackboard, activities, and exercises during class. Most reports only introduce the way to use Assistive Technology. The issue is that there are few reports on specific training methods for note-taking with Assistive Technology in class.

The purpose of this study is report on training using Assistive Technology note-taking for a child with writing difficulties over a 2.5 month period. During the 5 training sessions, the child not only learned how to use Assistive Technology, but also how to use it for specific purposes.

**Keywords:** dysgraphia, regular class, note-taking, assistive technology